

シノドスへの歩み みことばと共に 復活節第二主日C年

小西広志

2022年4月24日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。今日は2022年4月24日、復活節第二主日です。今日の三つの朗読箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

影

第一朗読は『使徒言行録』からです。使徒たちが奇跡をおこなったお話です。15節のことばに注目しましょう。「人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせた。ペトロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人のだれかにかかるようにした」。東京教区の雨宮神父さまの開説を読むと14節から15節は一つのつながりの文章だそうです。そして、一番伝えたいのは14節で「主を信じ、その数はますます増えていった」となります。その結果、15節にあるように「せめてその影だけでも病人のだれかにかかるようにした」という人々の行為となっていきました。信じた結果、そして神さまによって信者の群れに加えていただいた結果、人々は病人を運び出して、ペトロの前に置いたのです。「せめてその影だけでも」の影はギリシア語でスキアーと言うそうですが、光が当たってできる影法師の陰と、ある大切なものに守られていることを示す影の意味とがあるそうです。ですから、目の前を通るペトロの陰、影法師に包まれたいと、ペトロを通して働かれる神さまの恵みに守られたい、包まれたいという二重の意味があるのかもしれません。ペトロたちは華々しく活躍していますが、その影には神さまが働いておられるのです。

恐れるな

第二朗読は『黙示録』の最初のところです。17節のことば「恐れるな。わたしは最初の者にして、最後の者」の「恐れるな」をここに留めたいものです。このことばはギリシア語ではフォベオマイだそうです。文字通り、恐怖やこわがることを意味していますが、そこから「畏れ敬う、尊敬する」の意味が生まれてくるのだそうです。人間は、自分の理解や知識、体験を超えた何かに出会うとき「恐れ」を抱きます。「恐れ」は悪い感情ではないと思います。むしろ、自分自身の限界をしるきっかけとなります。限界を感じている自分に対して、それでもなお相手に関わってくるときに、人は畏敬の念を相手に抱くようになるのではないのでしょうか。きょうのみことばでも、自分の理解と体験を超えたものを見てしまったヨハネに、「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である云々」(17 - 18節)と声をかけます。これが復活の主の優し

さです。

恐れで相手を陥れようとするのが、人間の常です。恐れるところをたくみに使って、相手をコントロールするのはよくないことであり、決してあってはなりません。「恐れるな」という復活の主のことばは、ビクビクしながら生きているわたしたちのところに届くことばなのです。

手

一つのことばに注目しながら今日の福音を詳しく見てゆきましょう。それはイエスさまの手です。「あなたがたに平和があるように」(19 節)と復活されたイエスさまはご自分の手と脇腹を弟子たちにお示しになります。

イエスさまのご生涯を振り返ってみますと手はとても大切な役割を果たしておりました。イエスさまは子供に「手」を置いて祝福し(マタ 19 章 13 節参照)、病人をいやします。また、「手」を差し伸べて弟子に指示を与え(マタ 12 章 49 節参照)、重い皮膚病をいやし(マタ 8 章 3 節参照)、水に沈みかけたペトロを救い出します(マタ 14 章 31 節参照)。また、イエスさまが「手」を取られて起こされると、ペトロの姑は熱が去り(マコ 1 章 31 節参照)、会堂長の娘はよみがえり(マコ 5 章 41 節参照)、目の不自由な者は見えるようになります(マコ 8 章 23 節参照)、汚れた霊にとりつかれた子供が自由になります(マコ 9 章 27 節参照)。イエスさまがふれた「手」のぬくもりとはどんなだったのでしょうか。

このように手を通してイエスさまは人々と交わるのです。同じように父なる神とイエスさまとの交わりも手に基づいています。というのは、イエスさまは十字架上でその霊を御父の「手」にゆだね(ルカ 23 章 46 節参照)亡くなりました。同時に『ヨハネによる福音書』には「御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた」(ヨハ 3 章 35 節)とありますから、神はすべてを御子であるイエスさまの「手」にゆだねておられるのです。この御父と御子の強い結びつきに招かれた人々を、誰もイエスさまの「手」から奪い取るものはいないのです(ヨハ 10 章 28 節参照)。

復活したイエスさまの「手」には、人々の罪(神を信じきれない闇)をあがなうために受けた傷がありました。普通、私たちは自分が受けた傷を赤の他人に見せることはしません。ましてやその傷が深ければ深いほど、その傷が信じていた人からの裏切りによってあたえられものであればあるほど、傷を隠します。しかし復活したイエスさまは傷を隠すことはありませんでした。なぜならその傷のついた手こそが愛の証しだったからです。その「手」が示されたとき、トマスは試すことなく、信じる者に変えられました。五感を超えた交わりに気づかされたからです。

まとめ

教会の典礼は五感に訴えます。見る、聴く、歌う、触れる、味わうと、神さまが与えてくださった恵みである感覚を通じて、教会は復活したイエスさまを感じ、そのイエスさまを死者の中から立ち上がらせてくださった天の御父を称えるのです。五感を使って祈りをさせてくださるのは聖霊です。ですから、典礼は父と子と聖霊の働く場です。繰り返しますが、聖霊を通じて御子イエスさまによって、父なる神を称えるのです。

そうしますと、典礼を執り行う教会には三位一体の神さまがおられます。三位一体の神さまの交わりがあるのです。

さて、今日の福音で「見ないのに信じる人は幸い」(29 節)と復活なさったイエスさまはおっしゃいます。これは、トマスを叱ったことばではありません。むしろ招きのことばです。確かに教会の中に、教会の真ん中

に復活したイエスさまはおられます。しかし、それをわたしたちは目で見ることにはできません。イエスさまが共にいてくださる、イエスさまは本当に復活したという事実を知るためには、人から伝え聞くしかないのです。今日の福音であれば「わたしたちは主を見た」(25 節)という他のお弟子さんたちの証言に頼るしかないのです。これからはことばによる証言、証しに頼っていきなさいというメッセージが「見ないのに信じる人は幸い」にはこめられているのではないのでしょうか。確かに、見ることは信じる上で大切です。しかし、一つの感覚にしか過ぎない見るに頼りすぎてはならないのです。五感のすべてを使って、つまり、自分のすべてを使って復活したイエスさまに出会わせてもらいましょう。教会とはそんなトータルな出会いができる場所なのです。